第 6 章

中央アフリカ共和国のイスラーム
――その理解のための基礎作業――

武内 進一

要約

中央アフリカ共和国の人口の大多数はキリスト教を受容しているが、北東部にはムスリムが居住している。彼らは国全体から見れば圧倒的な少数派だが、2013 年にボジゼ政権を打倒した武装勢力を輩出するなど、近年政治的に重要な役割を演じている。本章では、中央アフリカのイスラームを理解するための基礎作業として、北東部地域住民のイスラーム受容の過程を歴史的に跡付ける。この地域はチャド湖周辺からダールフールに至る中央スーダンに興隆したイスラーム諸王国の周縁部であり、奴隷供給地であった。19 世紀に奴隷調達活動がアフリカ大陸中心部へと移動するなかで、中央アフリカ北東部はそこからさらに南部に向かう奴隷調達活動の前線基地として、ムスリム支配者の権威下に置かれた。これが、この地域の住民がイスラームを受容する契機となったと考えられる。

キーワード

中央アフリカ共和国　イスラーム　イスラーム化　サヘル　スーダン　奴隷

はじめに

中央アフリカ共和国では、2013 年 3 月にボジゼ（François Bozizé）政権が北東部出身武装勢力セレカ（Séléka）の攻撃により瓦解して以降、政情不安が続いている。特にボジゼ政権が崩壊し、セレカの指導者ジョトディア（Michel Djotodia）が政権を奪取した直後は、国全体でキリスト教徒とムスリムという対立軸が顕在化し、激しい暴力が引き起こされた。この現象は世界的な関心を集めた。中央アフリカでこれまで顕在化したことのなかった宗

教対立が、突如甚大な暴力を伴って現出したからである。

本章は、この現象が私たちに突きつける様々な問いを出発点とし、中央アフリカ共和国のイスラームを理解するための準備作業として位置付けられる。ここで扱うのは、そもそもなぜ中央アフリカにムスリムが居住しているのか、という問いである。ムスリムは中央アフリカ人口の圧倒的少数派であり、そのほとんどが北東部に居住する。この地域の住民は、どのような経緯でイスラームを受容したのだろうか。基礎理論研究会の成果である本章では、既存の文献に依拠しながら、基本的な事実関係を整理する作業を行う。

第 1 節　中央アフリカのエスニック集団と宗教

まず、中央アフリカのエスニック集団と宗教の分布を確認しておこう。この国の主要なエスニック集団として挙げられるのは、国土中央部を主たる居住域とするバンダ、主に西部に居住し、一部はカメルーン国内にも居住するバヤ、東南部のコンゴ民主共和国国境域のザンデーンザカラ（Zande-Nzakara）などである（図 1 参照）。人口的にはバンダが最大、バヤがそれに続くと言われるが、それを裏付ける統計が存在するかどうかは確認できていない。これら集団はいずれもイスラーム化されておらず、植民地化以降にキリスト教を受け入れた。

最大のエスニック集団と言われるバンダの出自についてカルクは、もともとダールフールの山地に居住していたが、その後コット川上流地域に（図 2 参照）、そして 19 世紀には国土中央部に移動したと述べている（Kalck 2005, 14-15）。一方、ンボコロは、紀元前千年くらいの時期に原ウバンギ人（proto-Ubanguians）がこの地域に移動してきたとの Bouquiaux らの研究を引いて、その解釈に基本的に賛同しつつ、それは物理的な移動というよりチーフダムや王国の形での集団形成と見なすべきだと主張している。また、この地域の住民が、紀元後千年頃のナイロートの南下と、18 世紀以降激化した奴隷狩りを理由とする移動も経験したと述べている（M’Bokolo 1992, 520-523）。カルクの説明は、ンボコロの言う 18 世紀以降の動きに対応するものと考えられる。ンボコロがいうように、この時期、これらの集団は北方からの奴隷狩りの対象となり、それを避けて南方（現コンゴ民主共和国方面）や西方（現カメルーン方面）へと移動したようだ [1]。

---

[1] 嶋田義仁は、現カメルーンアダマワ高地にフルベ人が建国したレイ・ブーバ王国についての説明の中で、「ドレイの出身部族は、王国南部のバヤ族を除いて、王国内のすべての部族に及んでいる」と指摘している。そして「バヤ族がレイのドレイの中にいない」理由として、「バヤ族が王国の支配下に入ったのが比較的あとの時代で、レイにはバヤ族を受け入れる余裕がなかったためらしい。それにバヤ族は人喰い伝説がある人たちで、イスラーム教徒は人喰い人種をドレイにすることを嫌うからバヤ族をドレイにしなかった、という話を聞いたことがある」（嶋田 1995, 110）としている。この記述は、バヤがカメルーンに移動し、レイ・ブーバの支配者フルベ人と接触した時期が遅かったこと、そして彼らがフル

それでは、中央アフリカのムスリムとはどのような人々なのだろうか。彼らは大まかに言って３つに分類できる。第 1 にヴァカガ（Vakaga）県を中心とする北東部に住む人々（図 3 参照）、第 2 にフルベ人、第 3 にチャドなど周辺国からの移民である。第 1 の人々に関しては後の節で詳しく述べるとして、ここでは第 2、第 3 の人々について述べておこう。フルベは西アフリカの牧畜民で、18〜19 世紀に西アフリカのジハードを主導したことで知られる。中央スーダン[2]では、1804 年のウスマン・ダン・フォディオ（Usman dan Fodio）による「ジハード」宣言を契機としてソコト・カリフ国が成立したが、その影響力はカメルーン中部のアダマワ高地まで広がり、フルベ人が支配する諸国家がそれに従属するかたちで形成された（嶋田 1995, 序章）。ソコト・カリフ国、またそれに従属するアダマワ帝国の領域は現在の主権国家で言えばカメルーン止まりだが、その影響は様々な形で中央アフリカ領土内にも及んでいる。フルベ人の中には、政治とは無関係な生活を維持し、伝統的な生業である牧畜に従事して移動を繰り返す「ボロロ」（Mbororo）と呼ばれる人々がいる。ボロロは移動、遊牧を通じて中央アフリカ領域内にも入っている。これらフルベやボロロはムスリムと見なされる[3]。第 3 のカテゴリーの人々に関しては、ボジゼ政権がチャドのデビィ政権の影響下にあったことから、その時期にチャドからの移民が増加したと言われる（武内 2014）。

第 2 節　サヘルへのイスラームの浸透

中央アフリカ北東部のムスリムについては、やや長いタイムスパンの説明が必要である。本節ではこれ以降、中央アフリカにムスリムが居住するようになった経緯について整理を試みる。

サヘル地域へのイスラームの浸透は、ガーナ帝国に対するアルモラビッドの聖戦（1077 年）が画期とされる。ガーナ帝国はサヘル地域に出現した最初の大国家で、8 世紀のアラビア語史料に記録が現れる。現在のモーリタニア東部のマリ国境付近に首都があったと考えられており、現在のセネガル内陸部とニジェール川上流域の間の地域において、特に 10〜11 世紀に金の産出と長距離交易を基盤として繁栄した。商人を通じたガーナ帝国へのイスラームの浸透は早くからあったと思われるが、支配層がイスラームを受け入れるのはベルベル人によるアルモラビッドの聖戦以降である（宮本・松田編 1997: 131-133, 190-191）。

ベの眼から見れば「文化的に遅れた異教徒」であったことを示唆している。

[2] 本稿では原則として「スーダン」を”Bilad al-Sudan”、すなわち「サハラ以南の黒人の地」の意味で、またサヘルとほぼ同義で用いる。したがって、「中央スーダン」という場合には、ほぼ現在のナイジェリア、チャド、スーダン西部のサヘル地域を指す。

[3] ただし、特にボロロの場合ムスリムという強い自覚はあまり持っていないと考えられる。フルベ人であることからムスリムと見なされたと述べる方が妥当であろう。

13 世紀にソソ（Sosso）人の攻撃を受けてガーナ帝国が弱体化した後、マンデ系の民族がつくったマリ帝国がサヘル地域に興隆する。マリ帝国の中心地はガーナ帝国のそれより南のニジェール川流域で、13 世紀のスンジャータ王の時代に領域を拡大した。14 世紀前半には最盛期を迎え、1324 年に大量の金塊を持って豪勢なメッカ巡礼を行ったムーサ王（マンサ・ムーサ）の逸話はよく知られている。これに示されるように、マリ帝国の支配者はムスリムであった。マリもまた、バンブク（Bambuk）やブレ（Bure）など金産出地を擁し、サハラを越えた長距離交易を押さえることで繁栄した。マリ帝国の時代にはサハラ交易が一層発達し、トゥンブクトゥのような内陸の都市が繁栄した（宮本・松田編 1997: 191-194, Loimeier 2013: 80-81）。

マリ帝国に代わって 15 世紀半ばに興隆したのは、ソンガイ帝国である。その中心地はやはりニジェール川流域で、マリ帝国よりもやや下流にあたるガオ付近であった。ソンガイのイスラーム化において特筆されるのはアスキア・ムハンマド・トゥレ（Askia Muhammad Turé, 統治期 1493-1528）である。彼はマグレブから高名な学者アル・マギーリー（Abd al-Karim al-Maghili）を招き、前王ソンニ・アリー・ベル（Sonni Ali Ber）を追放した自らの行為について、非イスラーム的行為を許容した前王の行為を是正したものとして正当化させた。サハラ以南地域において、王朝の交代を正当化するために宗教的議論が用いられたのはこれが初めてだとロイマイヤーは述べている（Loimeier 2013, 83）。

第 3 節　中央スーダンにおけるイスラーム化

中央アフリカの東部地域におけるイスラームを考えるとき、関連するのはカネム・ボルヌ（Kanim-Bornu）[4]帝国である。早い時期からチャド湖東岸部に興隆したカネム国が、14 世紀後半国家が弱体化すると西岸地域のボルヌ国に吸収されたため、時代に応じて呼び名が変わることがある。ボルヌ国は、19 世紀末にスーダン出身の奴隷商人ラビーフ（後述）に征服されるまで存続した。ガーナ、マリ、ソンガイというサヘル地域西部の大帝国はいずれも金産出地を擁し、河川流域に発達したが、カネム・ボルヌはチャド湖という湖の周りに繁栄した大帝国であり、また金産出地を持たないため輸出産品を奴隷に依存した[5]。

カネム国に対する言及は、紀元後 872 年のアラビア語史料に見られるが、当時この国はザガーワ（Zaghawa）人の支配下にあったという（Lange 1988, 439）。カネムはチャド湖東部にあり、現リビアのトリポリからフェッザーン（Fezzan。リビア南部）を通って中部サヘル地域を結ぶ交易ルートに位置していた。カネムの建国は 9 世紀よりさらに前だが、建

[4] Loimeier (2013)の表記。『ユネスコ・アフリカの歴史』では、Kanem-Borno と表記している。

[5] 奴隷の他に岩塩などの産品も輸出されたが、奴隷に対する依存度が西アフリカの大帝国より高かった。

国に際してイスラームは特筆すべき役割を果たさなかったと考えられる。カネムにイスラームが入ってくるのは、8 世紀以降フェッザーンのベルベル人商人がイスラームに改宗してからであり、当初は彼らの影響を受けてイバード派のイスラームが広がったと見られる（Lange 1988, 450-451）。11 世紀後半（1075 年頃）、カネムの王朝からザガーワが駆逐されセーフワ（Sefuwa）朝へと変わるが、ザガーワ朝末期に王がイスラームを受容したようだ。ただし、伝統宗教との併存はその後も長く続いた（Lange 1988, 454-460）。

カネムの最盛期は 13 世紀ころと考えられ、領域も北方に広がったが（ランゲ 1992, 369）、南方に拡大することはなかった。この地理的不均整をもたらした要因として、奴隷貿易との関係を指摘できる。イスラーム法はムスリムを奴隷にすることを禁じているが、現実にはムスリムであっても奴隷化されることはあった。それに対して、支配者が自分と同じ政治共同体に属している者を襲撃して奴隷にすることはまれであり、レヴィツィオンによれば、支配者はしばしば異教徒が住む地域を自らの領域に組み込むことを意図的に避けたという[6]。全盛期のカネムが北方に拡大したというのも、南方（現在のチャド南部近辺）は奴隷供給地として位置付けられたからであろう。ボルヌは 13 世紀には既に存在しカネムの宗主権下にあったが、次第に国力を増し、14 世紀後半にブララ（Bulala）人の攻撃を受けるなどしてカネムが衰退すると立場を逆転させた（ランゲ 1992, 373; Barkindo 1992, 492）。

カネムを吸収したボルヌを興隆させた支配者として、アリー・ガジ(Ali Gaji。統治期 c1465-97)を挙げることができる。彼は王族に広がっていたシンクレティズムを排除し、ウラマーをアドバイザーに置いてイスラーム再興を成し遂げたと評価されている。彼は 1484 年に巡礼し、カリフの称号を得た。これ以降、ボルヌはカリフ国として知られるようになる（Barkindo 1992, 493）。15 世紀末から 16 世紀初めの時期、サヘルの広い地域でイスラーム化が活発に進んだ。ソンガイのアスキア王については前述したが、ハウサランドの諸王国でも「15 世紀には・・・強力なイスラムの伝統が確立された」（アダム 1992, 423）し、1504 年にナイル川上流域で建国されたフンジュ（Fundj）スルタン国では建国後すぐにイスラームが国教とされた（Barkindo 1992, 495）[7]。

ボルヌの最盛期は、アラウォマ（Alawoma）の名で知られるイドリス・アリー（Idris b. Ali。統治期 1564-77 年）と言われる。アラウォマはカネムを数回討伐し、さらに弱体化させるとともにその人口を吸収していった。また、マンダラ（Mandara）やバギルミ（Bagirmi）といった周辺の小国家を攻撃して奴隷を捕獲し、その女性との婚姻を通じて自分たちの文化を広めていった。バルキンドは、これをカヌリ（Kanuri）人の形成過程として理解して

---

[6] Levtzion 1985, 192-193。レヴィツィオンは、異教徒が住む領域を積極的に自らの統治に組み入れる例外的な事例として、当該領域を他の政治権力と競合した場合（19 世紀のボルヌがこれに当たると述べている）、また当該領域ある別の資源（鉱物など）を利用する意図がある場合を挙げている。

[7] とはいえ、フンジュにおけるイスラームには、それ以前の様々な要素が残存していた。このシンクレティズム的性格については、福井ほか（1999, 318-319）でも触れられている。

いる（Barkindo 1992, 497）。アラウォマはまた、1571 年にメッカ巡礼を行い、帰国後にイスラーム改革を実施した。交易路を押さえるとともにチャド湖の漁業によっても繁栄したボルヌは、イスラームを積極的に振興し、オスマントルコやモロッコとも外交関係を樹立した。ただし、後述するように、イスラーム浸透以前に起源を持つ「聖なる王」という特徴はこの時期にも残存しており（Barkindo 1992, 509）、これが 19 世紀のジハードにつながっていくことになる。

ソンガイ帝国が崩壊した後、大帝国が消失し、小規模国家の並立状況が出現したサヘル西部地域と対照的に、中央スーダンではボルヌが大規模な領域を支配し続けた。とはいえ、16 世紀を過ぎるころから、ボルヌの周辺に幾つかの国家が成立し始める。中央アフリカ共和国東部との関連という観点から、チャド湖東方に力点を置いて、簡単に解説しておこう。

まず 16 世紀、ボルヌの南東部、現在のチャドの領域にバギルミ（Bagirmi）スルタン国が成立する。バギルミの支配者はイスラームを受容し、ボルヌに貢納する従属国であったが、ちょうどカネムとボルヌがそうであったようにその関係は時代によって様々である。周辺領域から奴隷を調達してボルヌに貢納することもあれば、ボルヌとの間で相互に襲撃したり、自律的な立場を確保した時期もあった。奴隷調達の主たる対象は、チャド南部のサラ（Sara）人であったが、彼らを服属させて支配下に置くことはしなかった。バギルミはスーダン人奴隷商人のラビーフとの戦闘に敗れて従属し、1897 年にはフランスの保護領下に入る（Kalck 1992, 14）。

ボルヌの東部、ダールフールとの間には、17 世紀にワダイ（Wadai）スルタン国が成立した。ワダイもまた奴隷狩りを行ったが、その主たる対象には現中央アフリカの領域が含まれていた。その歴史的説明として、カルクは概略次のように述べている（Kalck 1974, 95）。1826 年にバギルミの王が死んだとき、慣習に従って、世継ぎの皇太子の兄弟は眼を潰されることになった。皇太子の弟ウスマンはこれを逃げてメッカに巡礼に行き、1830 年に帰国するとワダイに移り、アズム（Azoum）川[8]とアウク（Aouk）川[9]付近の領域統治を命じられた。この地域の住民はサラ人とバンダ人だったが、イスラム化が進んだ結果ルンガ（Rounga）と呼ばれていた。ウスマンはその地域の支配者の娘と結婚し、アウク川を越えた地域（すなわち、現中央アフリカ共和国北部）を支配下に置いて、グラ（Goula）人、サバンガ（Sabanga）人、バンダ人などを襲撃して奴隷を調達した。この地域はダル・クティ（Dar Kuti）[10]と呼ばれ、中央アフリカ北東部のムスリム居住地と重なる（Kalck 1992: 48-49）。

ワダイの東に位置するダールフールは、その名の通りフール（Fur）人を基盤とする国である。フール人はイスラーム化された民であり、自らをファルティート（Fartit）と呼ばれ

[8] チャド南部を流れる Bahr Azoum のことと考えられる。これはワジ（涸れ川）である。
[9] 中央アフリカ東部とチャドの国境を画す川。図 3 では Bahr Aouk と表示されている。
[10] ダル・アル・クティ（Dar al Kuti / Dar al Kouti）と表記されることもある。

る異教徒と対比させる。ファルティートとはダールフールの南に居住する様々な集団を指すが、フールにとっては奴隷狩りの対象である。栗田は、先行研究を引きながら、フールとはそもそもファルティートの一部がイスラーム化した集団であるという仮説を紹介している（栗田 2001, 42-47）。ダールフールの肥沃な農業地帯に居住する農耕民社会が国家形成の過程でイスラーム化し奴隷狩りを行う立場の「フール」と、その対象である「ファルティート」に分離したという説である。この説は、他のサヘル地域においても奴隷狩りの対象となる近隣の異教徒を一括して呼ぶ語彙が存在すること―ボルヌやバギルミの場合は「キルディ」（Kirdi）、ワダイの場合は「ジャナカラ」（Janakhara）―を考え合わせると非常に興味深い。

「ファルティート」は時に「ニャムニャム」（Niamniam）とも呼ばれるが、ここからレヴィツィオンは 11～14 世紀のアラブ人地理学者の影響を指摘している。というのも、彼らの著作ではしばしば、「ナムナム」（Namnam）、「ラムラム」（Lamlam）、「ダムダム」（Damdam）、「アミマ」（Amima）、「バルバラ」（Barbara）といった言葉がいわゆる「野蛮人」というニュアンスで使われてきたからである（Levtzion 1985, 185-186）。14 世紀にアル・ディマシュキ（al-Dimashuqi）は次のように記述している。

> 「野蛮人は、ラムラム、ナムナム、そしてダムダムに分かれる。ムスリムの近くに居住している者は秘部を皮で覆っているが、ムスリムから遠く離れて住むダムダムなどは、人間とあまりに隔絶した暮らしをしているので、手に入るものは自分の仲間以外なんでも食べてしまう」（Levtzion (1985, 186）から再引用)

近隣の非ムスリムを「野蛮な食人種」と捉える認識は、アラブ知識人の影響を受けたサヘル地域に広く存在していたと考えられる。この認識を背景に、スーダン中央のイスラーム諸国は南方の領域を奴隷狩りの対象としたのである。カルクによれば、バギルミ、ワダイ、ダールフールのイスラーム諸国は、その南方に位置する現中央アフリカの領域において盛んに奴隷狩りを行い、バギルミはウハム（Ouham）川とグリビンギ（Gribingui）川の間、ワダイはグリビンギ川とボング（Bongou）川の間、ダールフールはボング川とメラ山（djebel Mela）の間が主要な活動領域だったという（Kalck 1974, 73）[11]。

第 4 節　19 世紀のジハード

奴隷狩りの対象とする非ムスリムとの関係ではイスラームを強調していたものの、これらのムスリム国におけるイスラームの実践は長く土着の伝統宗教の影響を受け続けた。商

[11] ウハム川、グリビンギ川はいずれもシャリ（Chari）川の上流にあたる（図３参照）。ボング川は、ウバンギ川の支流コット（Kotto）川のさらに支流にあたると考えられる。メラ山は中央アフリカのオート・コット県北部に位置する。

人や知識人から支配者がイスラームを受容しても、農村部にすぐ浸透したわけではない。16 世紀頃のハウサランドに関してアダムは、イスラーム化がエリートと交易商人に限定されており、ほとんどの場合ムスリムを自任していても「信仰は中途半端なものにすぎず、神殿の聖なる岩や木への祈りを通して、他の神々を信じ続けていた」と述べている（アダム 1992, 425）。言い換えれば、伝統宗教と両立可能と見なされたからこそ、イスラームが受け入れられたのである [12]。

また、イスラームを受け入れた支配者もまた、伝統宗教を捨てなかった。伝統宗教は彼らの権威の源泉に関わるものであるだけに、それを簡単に捨てられなかったのである。チーフであることとムスリムであることは、容易に両立しなかった（Levtzion 1979, 213）。14 世紀にマリ帝国を訪問したイブン＝バトゥータは、王の前に出るときは女性が全裸になったり、尊敬のしるしとして頭に塵を撒き散らすといった「恥ずべき行為」を行うと指摘した（Levtzion 1979, 212）。もっと後になっても、「聖なる王」という性格を示す行動は様々な形で残存した。ダールフールでは 17 世紀にイスラーム法が採用されたが、王が特定のヴェールを被る、仲介者を介してしか会話をしない、必ず独りで食事をとる、訪問者が塵を頭に撒き散らすといった決まり事、タブーは変えられなかった。ワダイ、バギルミ、フンジュでは、王が即位すると、その兄弟は眼を潰された [13]。

18〜19 世紀のジハードによって、サヘル地域では史上初めて宗教指導者が政治権力を握ることになるが、彼らが問題としたことの一つはこうしたイスラーム化以前の慣習であった（Levtzion 1979, 212）。加えて、奴隷交易に対する反発（ムスリムであっても捕えて奴隷にしてしまう）がジハードの背景にあったと指摘されている。16 世紀以降西部スーダンの大帝国が崩壊し、より小規模な王国が林立するようになると、同じ時期に本格化する大西洋奴隷貿易の影響と相俟って、交易路、金などの資源、そして奴隷をめぐる小王国間の戦争が激しさを増した。ジハードにはこうした状況に対する不満や抗議が示されているという（Loimeier 2013, 110-111）。19 世紀におけるハウサランドのジハードに関して、ロイマイヤーは、それが異教徒を改宗させるための運動というよりも、ムスリムの「不信心者」（kufr）に対する改革運動であったことを強調している。ウスマン・ダン・フォディオの見解によれば、イスラームとシャリーアに則った生活をしていない者たちは罪深い行為をしているものの、「不信心者」としてジハードの対象とすることはできない。むしろ、民衆のそうした行為を放置している支配者こそ「不信心者」であって、彼らに対するジハードは合法であるのみならず義務である（Loimeier 2013, 116-118)。こうした論理でソコト・カリフ国は

---

[12] イスラームと伝統宗教の歴史的な共存過程については、坂井（2003)を参照。また、現代における共存に関しては日野（1987）や和崎（1987）が詳細に記録している。

[13] Loimeier (2013, 86-88)。イスラームを受容した社会で王が有する「非イスラーム」的な聖性については、日野(1987)や和崎(1987)も参照。アフリカにおけるイスラームのシンクレティズム的性格については、福井他（1999, 第 3 部）が全体像をうまく説明している。

周辺の国々を攻撃し、領域を拡大していったのである[14]。

第 5 節　19 世紀後半における奴隷商人の活動

中央アフリカ北東部のムスリムの起源を考えるうえで重要なのは、エジプトにおけるムハンマド・アリー朝の成立以降の政治過程である[15]。1798 年にナポレオンがエジプトに上陸し、マムルークの軍を撃破した後の混乱をついて、アルバニア出身のムハンマド・アリーが政権を握り、1805 年にオスマン朝からスルタンの称号を得た。ムハンマド・アリーの下でエジプトは近代化と対外的拡張に乗り出す。1821 年にはフンジュ国を征服し、ナイル川沿いのスーダン（東部スーダン）の植民地経営を開始した。この時期スーダンに派遣されたエジプトの官僚はオスマン帝国各地から徴集された[16]。

スーダンの植民地化に伴い、ジャッラーバ（jallaba）と呼ばれる北部スーダン出身の商人が南部へと交易活動を広げ、奴隷取引を活発化させた。奴隷狩りの場としてヌバ山地がよく知られているが、この時期には西方のバフル・アル・ガザールにも奴隷取引が広がっていった。この文脈で重要な役割を果たした商人の一人が、ズバイル・ラフマ・マンスール（al-Zubayr Rahma Mansur。1830-1913）である。北部スーダン出身のズバイルはハルトゥームで教育を受けたのち南部交易に従事するが、1850 年代になると、ダールフール国の外縁部、ファルティートの地として位置付けられていたバフル・アル・ガザール（Bahr al-Ghazar）へと進出し、商業拠点を建設した[17]。そして、バフル・アル・ガザールからナイル川を通らずにコルドファンのエル・オベイド（el-Obeid）へと物資を送る交通路を開くことで、強大な勢力を築いたのである。交易を通じて、現中央アフリカからコンゴ民主共和国に居住するアザンデ社会に食い込み、1865 年にはクールー（Qulu）と呼ばれるアザンデの一集団

---

[14] ソコト・カリフ国の攻撃を受けたボルヌでは、1805 年、皇太子のマイ・デュナマ（Mai Dunama）に王位が譲渡され、宗教指導者のムハマド・アル・カニーミー（al-Hajj Muhammad al-Amin b. Muhammad al-Kanimi）がマイ・デュナマの信任を得て政治に関与し、ソコトとの戦闘に勝利して政治権力を握った。ボルヌにおいてもソコトと同様に宗教指導者の統治に関わることになったのである。アル＝カニーミーは、ソコトによるボルヌへの攻撃を違法だと宣言した。19 世紀のジハード以降、軍事力だけでなく宗教イデオロギーによる戦いも活発化したのである。

[15] 以下の記述は、断りのない限り、Loimeier (2013, 第 7 章)、栗田（2001, 第 1 章）、そして大塚他編（2001）に基づく。

[16] 1820～85 年の植民地スーダンにおける 33 人の知事の内訳は、チェルケス人 8 人、トルコ人 5 人、クルド人とギリシャ人各 2 人、アルバニア人、ベルベル人、英国人各 1 人などで、エジプト人は 3 人に過ぎなかった（Loimeier 2013, 156）。

[17] ジャッラーバの南進は、エジプトの反奴隷貿易政策によっても促進された。エジプトは、ケディヴ・イスマーイール（Khedive Ismail）の治世下（1863-1879）において、反奴隷貿易へと政策転換を行う。近代化を進めるエジプトにとって時代遅れと見なされたし、英国から繰り返し非難されていたことが政策転換の背景にあった。奴隷取引に対する当局の監視を嫌って、商人たちはエジプトの統治地域の外で奴隷獲得活動を行うようになった。

を征服した。そして、そこにデム・ズバイル（Dem Zubayr）と称する街を築き、いわば一国の主となった。強大な勢力となったズバイルはエジプト行政への納税を拒否し、それに対してエジプトが送った討伐隊を 1872 年、73 年と続けて撃破した。そして 1874 年には 6,400 人の奴隷兵士と 9,000 人のジャッラーバを引き連れてダールフールを攻撃し、これを征服した。エジプトはズバイルをバフル・アル・ガザールの知事に任命したが、ダールフールに対する権利は認めなかった。結局ズバイルは、ダールフールへの権利を主張するためにカイロを訪問した際にエジプト当局に捕えられ、収監されてしまう。

ズバイルが収監された後、奴隷交易の維持・拡大に重要な役割を果たしたのは、ラービフ・ビン・ファドル・アラー（Rabih b. Fadl Allah。1845?-1900）であった。ハルトゥーム生まれの彼はズバイルの部下として働き、ズバイルが失脚しズバイルの息子が殺された後、奴隷商集団の指導者となった。ダールフール南部のクレイシュ（Kreich）を本拠とし、そこからさらに南西部へと襲撃対象を広げた。キルディに語源を持つクレイシュは、まさに「野蛮人の土地」を意味する。その領域はコット川上流（すなわち現ヴァカガ県付近）であり、もともとバンダが居住していたが、奴隷狩りのため無人の地と化したという（Kalck 2005, 114）。ラービフは襲撃、略奪によってダール・マラ（Dar Mara）、ダール・クティ（Dar Kuti）、ダール・シラ（Dar Sila）などの集団を征服し、自分の配下を知事として任命した。1889 年、シャリ川に到達し、そこからチャド湖に向かう交易路確保のために戦闘を開始する。結果として、ラービフは 1891 年にワダイ、1893 年にはボルヌを征服した。バハル・アル・ガザルからチャド湖に至る地域を勢力下に収めたラービフだが、植民地支配を狙って進軍したフランス軍と衝突し、1900 年に殺害された。彼の死によって、この地域もヨーロッパ列強の勢力下に置かれることになる。

むすび

本稿では、中央アフリカ共和国北東部の住民がイスラームを受容した経緯を理解するために、中央スーダンにおけるイスラーム化の過程を整理してきた。中央アフリカの北部は、サヘル地域に成立したイスラーム諸国家の外縁部であり、カネム＝ボルヌ、バギルミ、ワダイ、ダールフールといった国々から奴隷狩りの対象とされてきた。その対象地域は時代が下るにつれて南下し、それに対応してイスラームを受容する地域も―同じペースではないものの―南下したと考えられる。

ムスリムと非ムスリムの集団が接触し、前者が後者を奴隷化する場合、それがイスラーム伝播にもたらす影響には二つの方向性がありうる。第 1 に、伝播が妨げられる可能性がある。イスラームの教義はムスリムを奴隷にすることを禁ずる一方、奴隷に対してはイスラームの教えを広めることが義務付けられている。逆に言えば、イスラームを奉じる国の

周辺にファルティートやキルティのような非ムスリム居住地を抱えていることが、継続的な奴隷調達を可能にする。したがって、非ムスリム居住地を自らの統治下に置いてイスラーム化せず、意図的に非ムスリムのまま放置する戦略が選択される可能性がある。北方に領土を拡大しても南方には拡大しなかった繁栄期のカネム国は、この例と言える。

第 2 に、イスラームの伝播が促される可能性がある。奴隷とイスラーム化の関係を検討した論文の中でレヴィツィオンは、奴隷狩りの対象となった地域がさらに遠くに奴隷狩りに行くための前線基地になったとき、イスラーム化が始まると述べている（Levtzion 1985, 188）。先の教義にもかかわらず、現実にはムスリム国同士が戦争をすれば、相互に居住地を襲撃して住民を奴隷にすることはしばしばあった。しかし、支配者が自国内の住民を襲撃し奴隷化することは、たとえ彼らが非ムスリムであっても、それほど起こらなかった。自分の権威下にある者は庇護の対象になるからである。奴隷を需要し、周縁地域を襲撃する集団が拡大するとき、そこに組み込まれた地域ではイスラーム化が進展する。これは、中央アフリカ北東部がイスラーム化したプロセスを説明するメカニズムとして有効だろう。

中央アフリカ北東部は、かつてダール・クティと呼ばれた地域に重なる。ダール・クティという政治共同体の性格はなお不明な点が多いが、さしあたりはクティというエスニック集団を基盤にしたものと考えられる [18]。ダール・クティは先述したように、もともとバギルミの皇太子の弟がつくった国だが、現中央アフリカ共和国中部に派兵し、バンダ人などその地の居住者を捉え奴隷として売却するための拠点として形成された。そのような形であれ、ムスリムの支配者の権威の下に入ったことによって、この地においてイスラーム化が進んだと考えられる。ただし、この経緯から想像されるのは、その地における「イスラーム」の実態は土着宗教と著しく混交したものであったであろうことである。中央アフリカでは、北東部においてはこうした形で 19 世紀に「イスラーム化」が進み、そのほかの地域ではフランス植民地の下で「キリスト教化」されるのであるが、両者がいずれも土着宗教の強い影響の下にあったことは疑いないところである。

参考文献

【日本語文献】

アダム、M. 1992.「中央スーダンにおけるハウサ人と近隣諸民族」D.T.ニアヌ編（アフリカの歴史起草のためのユネスコ国際学術委員会 [編]）（宮本正興・日本語版責任編集）『ユネスコ・アフリカの歴史第 4 巻　一二世紀から一六世紀までのアフリカ』同朋舎

[18] アラビア語の「ダール」(dar)は、「～の家」、「～の地」という意味を持つ。「ダールフール」が「フール人の地」であるように、ダール・クティは「クティ人の地」であろう。ロイマイヤーは、Dar Kuti、Dar Mara、Dar Sila といった集団に”tribal kingdoms”という言葉を当てて説明している（Loimeier 2013, 170）。

出版、391-443.
大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編　2001.『岩波イスラーム辞典』岩波書店.
栗田禎子　2001.『近代スーダンにおける体制変動と民族形成』大月書店.
坂井信三　2003.『イスラームと商業の歴史人類学―西アフリカの交易と知識のネットワーク』世界思想社.
嶋田義仁　1995.『牧畜イスラーム国家の人類学―サヴァンナの富と権力と救済』世界思想社.
武内進一　2014.「中央アフリカにおける国家の崩壊」『アフリカレポート』52: 24-33.
日野舜也　1987.「歴史のなかのブーム族」川田順造編『黒人アフリカの歴史世界』山川出版社、274-293.
福井勝義・赤坂賢・大塚和夫　1999.『世界の歴史 24　アフリカの民族と社会』中央公論社.
宮本正興・松田素二編　1997『新書アフリカ史』講談社現代新書.
ランゲ、D. 1992.「チャドの諸王国と諸民族」D.T.ニアヌ編（アフリカの歴史起草のためのユネスコ国際学術委員会 [編]）（宮本正興・日本語版責任編集）『ユネスコ・アフリカの歴史第 4 巻　一二世紀から一六世紀までのアフリカ』同朋舎出版、351-390.
和崎春日　1987.「アフリカの王権とイスラム都市―イスラム教生活からみたバムン王都の都市人類学」和田正平編『アフリカ―民族学的研究』同朋舎出版、147-263.

【外国語文献】

Barkindo, B.M. 1992. “Kãnem-Borno: Its Relations with the Mediterranean Sea, Bagirmi and Other States in the Chad Basin.” In *General History of Africa V. Africa from the Sixteenth to the Eighteenth Century*, Edited by B. A. Ogot, Paris: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, 492-514.
Kalck, Pierre 2005. *Historical Dictionary of the Central African Republic (Third Edition)*. Lanham: The Scarecrow Press, Inc.
Kalck, Pierre 1974. *Histoire de la république centrafricaine*. Paris: Editions Berger-Levrault.
Lange, D. (in collaboration with　B.W. Barkindo) 1988. “The Chad Region as a Crossroads,” In *General History of Africa III. Africa from the Seventh to Eleventh Century*, Edited by M. El Fasi, Paris: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, 436-460.
Levtzion, Nehemia 1979. “Patterns of Islamization in West Africa.” In *Conversion to Islam*. Edited by N. Levtzion, New York: Holmes & Meier, 207-216.
Levtzion, Nehemia 1985. ”Slavery and Islamization in Africa: A Comparative Study.” In *Slaves and Slavery in Muslim Africa, Islam and the Ideology of Enslavement* (Vol. 1). Edited by J.R. Willis,

London: Frank Cass, 182-198.

Loimeier, Roman 2013. *Muslim Societies in Africa: A Historical Anthropology*. Bloomington: Indiana University Press.

M'Bokolo, Elikia 1992. "From the Cameroon Grasslands to the Upper Nile," In *General History of Africa V. Africa from the Sixteenth to the Eighteenth Century*. Edited by B.A. Ogot, Paris: United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization.

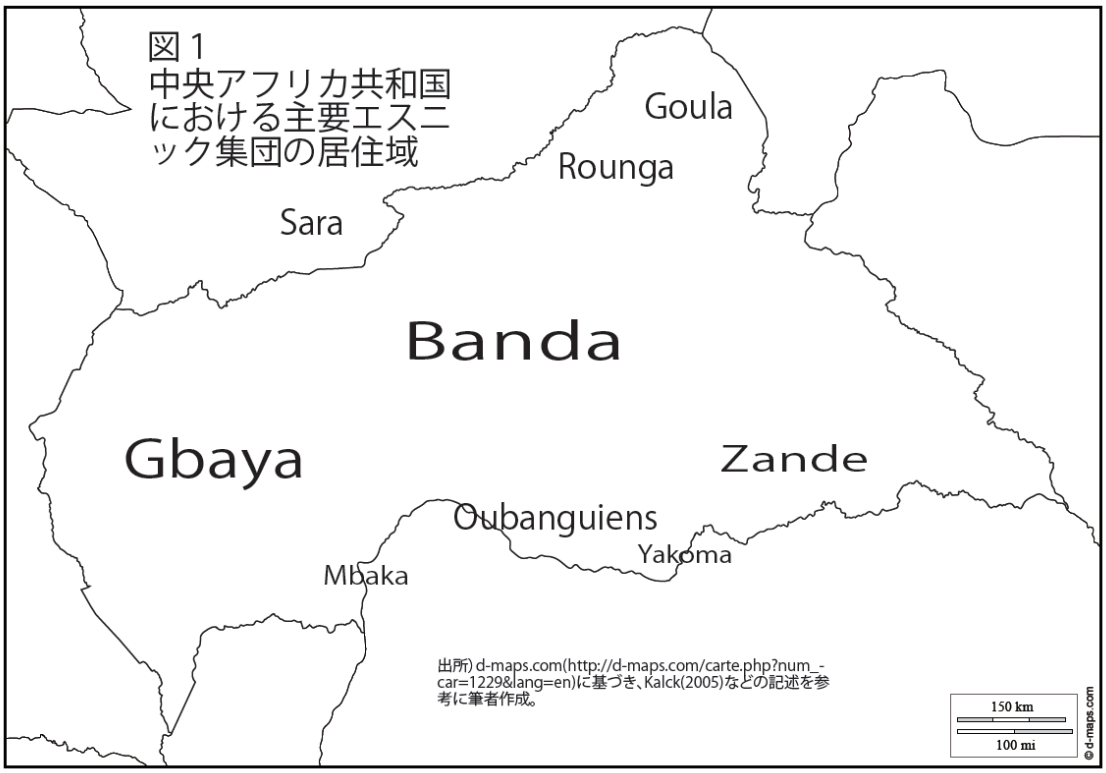
図１
中央アフリカ共和国
における主要エスニ
ック集団の居住域
Goula
Rounga
Sara
Banda
Gbaya
Zande
Oubanguiens
Yakoma
Mbaka
出所) d-maps.com(http://d-maps.com/carte.php?num_car=1229&lang=en)に基づき、Kalck(2005)などの記述を参考に筆者作成。
150 km
100 mi
© d-maps.com

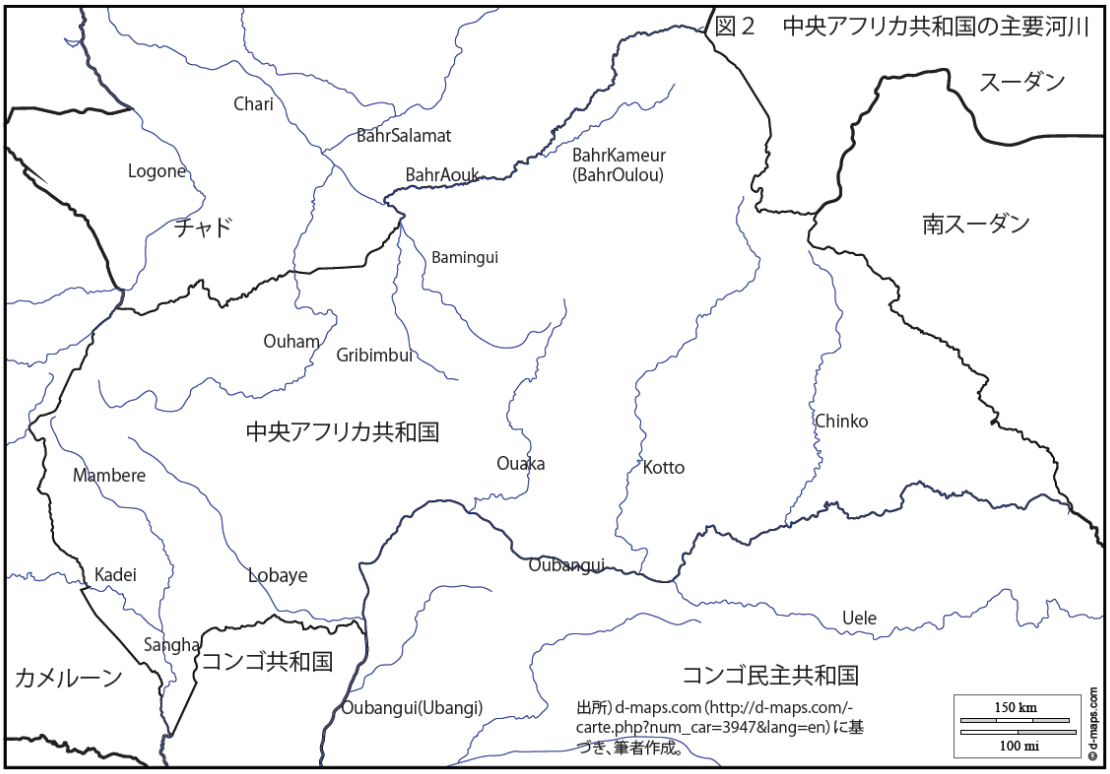
図２　中央アフリカ共和国の主要河川
スーダン
Chari
BahrSalamat
Logone
BahrAouk
BahrKameur
(BahrOulou)
チャド
南スーダン
Bamingui
Ouham
Gribimbui
中央アフリカ共和国
Chinko
Mambere
Ouaka
Kotto
Kadei
Lobaye
Oubangui
Uele
Sangha
コンゴ共和国
カメルーン
コンゴ民主共和国
Oubangui(Ubangi)
出所) d-maps.com (http://d-maps.com/-carte.php?num_car=3947&lang=en) に基づき、筆者作成。
150 km
100 mi
© d-maps.com

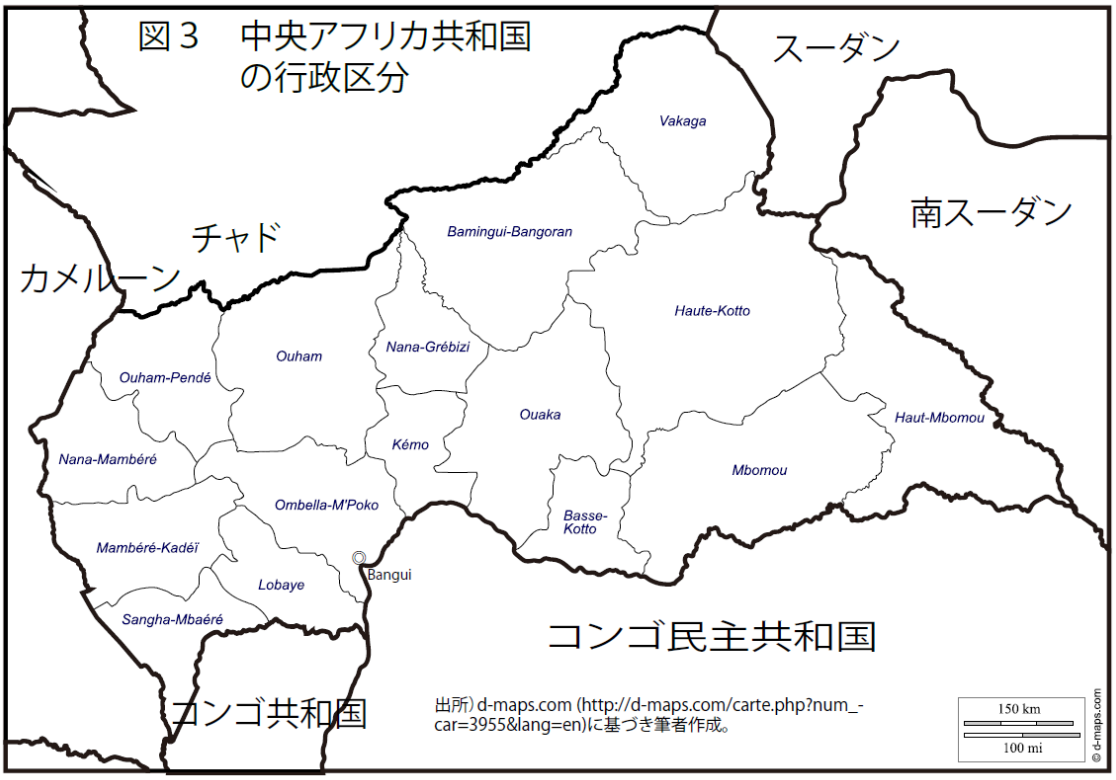
図３　中央アフリカ共和国
の行政区分
スーダン
南スーダン
チャド
カメルーン
コンゴ民主共和国
コンゴ共和国
Vakaga
Bamingui-Bangoran
Haute-Kotto
Ouham
Nana-Grébizi
Ouham-Pendé
Ouaka
Haut-Mbomou
Kémo
Nana-Mambéré
Mbomou
Ombella-M'Poko
Basse-Kotto
Mambéré-Kadéï
Bangui
Lobaye
Sangha-Mbaéré
出所）d-maps.com (http://d-maps.com/carte.php?num_car=3955&lang=en)に基づき筆者作成。
150 km
100 mi
© d-maps.com